

留学報告書

システム創成学専攻 修士 1 年

高橋研究室 中村太郎

留学先：オランダ、デルフト工科大学

期間：2014 年 8 月 15 日-2015 年 1 月 31 日（6.5 か月間）

1 イントロ

まず初めに私の留学の全体像をさらっておきたいと思います。私のプログラムは少し特殊かもしれません。というのはこの半年の交換留学のみで帰国するものではないからです。工学系研究科経由の半年の交換留学と研究室経由の半年の現地でのインターンシップこの二つから私のプログラムが成ることに留意ください。合計 1 年間であることからわかる通り、私は修士標準期間から 1 年延ばす選択をしました。従って就職活動、修論研究は並行していません。さらに言えば向こうで研究室に所属せずに授業だけを取りました。

本報告書は‘留学’報告書とあるように、私のプログラム前半の大学における留学に関して、留学準備期、留学期、留学終了準備期に分けて時間の流れとともに記します。これから留学に行く人のための簡単なガイドになるように作成しました。

2 留学準備期（2013 年 11 月～2014 年 3 月）

この期間に行ったことは語学能力、資金、事務手続きに関する準備の 3 点に絞られるかと思えます。正直とても大変でした。途中で投げ出したくなったことが多々ありましたのでこの期間に入る前に「私は留学に行くのだ」という意思を固めるのに時間をしっかりと取ることをお勧めします。

2.1 語学

私の留学先であるオランダは英語の普及度が高く（非英語圏中、北欧に続き 3 位）、そのためか TOEFL の要求水準も他より高い 90 点でした。帰国子女でも何でもない私には決して低いハードルでした。加えて、卒論の追い上げの期間であったために英語ばかりに時間を割くことはできませんでした。したがって総合的英語力は留学に行った後に鍛えるとして、その当時は TOEFL で 90 点以上を取るための対策をしていきました。具体的には出題分野別に過去問・模擬問題をひたすら解くということです。

2.2 資金

留学にかかる費用をどのように賄うのか。これも大きな問題でした。この時の感じたこと

は3つあって、まず、留学に行く決断を早くすればするほど応募できる奨学金の数は増えるということです。これは多くの奨学金は留学出発予定の1年ほど前に応募を締め切ってしまうためです。次に、ここで英語力・成績が効いてくるなど痛感しました。日頃の積み重ねがこういうところに表れます。最後に、準備期間の内容にもかぶりますが妥当な留学動機の大切さを感じました。やはり、資金提供者側は何らかの思いから海外で活躍する人材を育てたいという考えがあり、それが見込めそうな者に‘投資’します。それを判断するのに成績等のほかに志願者のビジョンを用いています。金銭の負担を少なくして留学に行きたい方はこれを知っておいて損はないと思います。

2.3 事務手続き

交換留学は大学という大きな組織同士の協定に基づいたものですので、それ相応の事務手続きが必要になります。また、ある事務手続きがまたあるほかの事務手続きを要することも多々あります。締め切りの管理および必要書類（戸籍、パスポートなど）が大変でした。事務室、指導教官の方々にはとてもお世話になりました。

3 留学期（2014年8月～12月）

本報告書のメインディッシュです。人の生活の基本は「衣・食・住」であるといわれますが、このほかに「学・遊」を加えた観点からまとめてみました。

3.1 衣

オランダは北海道よりも北寄りに位置することから、東京と同じような服装で行くと寒い思いをします。夏でも20度行くかどうかといった感じです。これに加え、海岸近くに位置するデルフトでは雨が頻繁に降ります。ただ、すぐやむものが多いです。よってあまり傘をさす人がいません。

以上をふまえると、服装は冬服をメインで持って行ってあとは暖かい日用の半そで短パンを持っていけばいいのではないかと思います。冬服といっても本格的なもので、ヒートテックやウルトラライトダウン、手袋、ニット帽は重宝しました。特に12月、1月の寒さは非常に応えるので本格的な冬物のコートを持っていく or 現地購入するか日本で使っているコートを重ね着するかの対策をした方がいいと思います。雨が多く降るので撥水性があるものだとなおよいでしょう。

3.2 食

まず、日々の食事は主に自炊をしました。レストランは10-20€するのであまり多用しませんでした。朝にシリアルとフルーツを食べて、昼は朝に作ったサンドイッチ（オランダ人はサンドイッチを本当に良く食べる）か学食（5-10€。これもサンドイッチ、または

トルコのケバブ（後述））を食べました。夜はパスタなり米なりを調理して食べました。

次にオランダのグルメ情報ですが、寿司ショップの多さに驚かされました。日本人経営のものはアムステルダムくらいにしかないようですが。イタリアンもあれば、魚、中華もあります。デルフトにはアルゼンチン料理もありました。この中で個人的に取り上げたいものがあるってそれはインドネシア料理とトルコ料理です。インドネシア料理はインドネシアが昔にオランダ領であったこともあって多く見られました。アジア人の舌に合うと思います。値段は少し張るものとてもおいしく量がありました。トルコ料理（ケバブ屋さん）はオランダにトルコ系移民が多いためかこちらもおおくありました。こちらの売りは安くておいしいというところでしょう。5 ユーロもあればおなかが満たされます。中でもオランダで日本のラーメンのように親しまれているカプサロンというものが多くの支持を得ています。これはトルコ発オランダ経由で発祥したものでトルコでは食べられないようです。病みつきになりました。

3.3 住

住処についてです。大半の人はデルフトの町に住みます。大学が斡旋してくれるので料金も 300-500€/月で比較的良心的です。デルフトは学生街ですのでたくさんの留学生が住んでいます。基本的に留学生は留学生用の寮に入ります。ゆとりのある基本的な家具付きのプライベートな部屋があってインターネット付、キッチンバスルームはシェアというところが基本だと思います。

残りの人々は隣町のハーグに住みます。私はそちらでした。書類手続きに遅れが発生してしまったためです。ハーグもオランダでは有数の国際都市で様々な国の人が暮らしています。料金は約 600€/月で高かったのですが、バスルーム別、レンタル自転車代、ジム代も含まれているというプラス面もありました。

治安はデルフトがかなり良く、ハーグは貧困層の地域も目立つようになり少し悪い場所もあるみたいでしたが大逸れたことをしなければ大丈夫だと思います。スリは繁華街や電車内にいますので気を付けてください。

3.4 学

ここではデルフト工科大学での暮らしについてを書きます。まず学期始まりの前に introduction program というものがありました。このプログラムは全学のものと私が所属する Track のもの、二つがありました。どちらも選択自由で予めお金を取られますが、その分内容は充実していました。結構アクティブな内容でおとなしめの方は少し敬遠してしましがちですが、私は行くことをお勧めします。全学のものは期間が2週間、最初の一週間は留学生同士の交流、そしてオランダ生活のスタートアップのための諸々の手助け（生活必需品

を買う場所の紹介から近くの大都市のツアーまで)が主な内容でした。コンテンツが充実しておりデルフト大学自体が海外留学生を呼び寄せたい、増やしたいという思いがあることを感じました。70 か国以上の国々から留学生が来ているとのことで一定の成果を上げているのではないのでしょうか。中国人、インド人、ギリシャ人が最も多くどこにでもいる印象を受けました。残りの一週間において留学生たちは5-7人のチームに分けられ、チームビルディング、そしてグループワーク、その発表をしました。オランダ到着後すぐの2週間がこの活動であるために今思い返しても非常にめまぐるしい期間でした。特に後半の1週間は自身の英語の拙さはおろかディスカッション能力の低さをいやというほど感じたことは今でも覚えています。いい意味での最初の挫折でした。

Track のプログラムでは海辺の町に皆で趣き一泊二日の合宿を行いました。午前には工場見学を行い昼間から夕方は海岸でのレクリエーション(ビーチバレー、サッカー、日光浴)、そして夜はチーム対抗のクイズ大会がありました。

学期が始まると夏休みムードは消え普通の学生生活が始まります。一学期2クォーター制で、クォーターごとに試験がある授業が多いです。授業は2時間の尺でとられているが実質は90分授業です。残りの30分は45分経過時のコーヒープレイク(15分)と次のクラスへの移動時間(15分)に充てられていました。日本との違いとして感じたことは、講義室が大きくかつ平らでないということ(講義者のステージを囲む観客席というのが正確な描写だとおもいます)と、講義が座学だけでなく議論という側面も持ち合わせていることです。また、それぞれの学科がそれぞれの建物・自習スペースを持ちそれぞれが特徴的であったのが新鮮でした。私の出来はと言うと内容がこれまで勉強してきたこととは違う学問分野であったことに加え英語の授業であったのでそもそも言っていることを言葉で理解することをはじめそして初めて内容の理解が始まるといういわゆる難局でしたので、芳しくありませんでした(受けた試験すべて追試送り)。

1クォーター後、1週間の休みを挟み始まった2クォーターでは先クォーターに比べて慣れを感じ始めていました。それに乗じて自分の研究分野に近い内容の授業を他学部でとることも始めました。この授業はデルフト工科大学の看板学科の一つである航空宇宙学科の授業であり、座学に加え15枚のレポート作成、並びにそのプレゼンテーション発表そして最後に試験という豪華なラインナップでした。最初は不安であったものの意外とできるというのが私の発見でした。

またこのころから苦手だと感じていたグループワークでも一定の成果(チームに対するアイデア提供・議論への参加、レポートの作成など)を挙げられるようになっていきました。しかし一方で多国籍の人々が一つのチームとして機能することのむずかしさを痛感したのも

事実です。ミーティング時間はその時間の 0.5–1 時間前に決まる、成績が欲しい学生がメインのタスクを独り占めして最後の事務的作業のみ振ってくるなど、もう少し私自身うまく対応できたのではないかと反省もあります。しかし最終的にかなり良い成績もとれましたし、こういうことを知れたのは良かったです。本クォーター中間ではドイツのアーネムにおける鉱山開発現場へのスタディツアーにも参加したことで、学科に以前と比べ更になじんできたように感じました（他の留学生は参加しなかったのだが私だけ参加したということも大きい要因かもしれません）。このクォーター末の試験は先クォーターからの追試もあり、この半年で最も過酷なテスト週間を迎えました。

3.5 遊

最後に学校以外のプライベートな時間についてです。マスターの授業は大体週 2 – 5 コマ + グループワークのミーティングなのでこの時間も多くの割合を占めていました。

まず交際に関して。基本的にプライベートな時間はルームメイトたちと過ごしました。夜ごはんを一緒に作ったり、飲んだりワイワイやるときはやりました。寮主催のイベントもありそれにも参加して友達を作りました。周りからの要望が強かったので一緒にいた日本人たちで日本食パーティの企画をしたのも楽しかったです。あと、スポーツや音楽ができる人はそれを通じて交流するとさらに関係が深まる気がします。

日本人はどれくらいいるのか気になる人がいるかもしれないので書きますが、やや少なめですがいました。また、デルフト隣人会、シーボルト会、オランダ淡青会なる日本人コミュニティもあり、そこで様々なバックグラウンドの人々に会えます。

次は go out、お出かけに関してです。話が変わりますが、こちらの人々は今週末何するの？とか今晚何するの？とかをよく聞いてきます。よくわからないというと誘ってくれる人もいます。木曜や金曜の夜は町のスクエアにあるパブやバー、クラブに行くことが多いです。一杯 1–2€ くらいでビールは飲めます。

観光に関しては、オランダの町で言えばデルフトはもちろんアムステルダム、ロッテルダム、ユトレヒト、また親日な人が多い傾向にあるライデンがおすすめです。

また、オランダ以外に関しては LCC・ホステルを駆使して安く近隣諸国にも行きました。気づくとヨーロッパ諸国をオランダ基準で比較している自分がいて面白かったです。

「よく遊び、よく学べ」という言葉がありますが、どちらか一方に極端にならないよう、また自分にとって「よく」というのはどの程度なのか考えた上で計画的に行動できると実りある経験ができると私は思います。

4 留学終了準備期間（2015年1月）

最後の最後にまでテストがあったのでとても慌ただしい期間でした。スーツケース一つで来たはずなのにそれをはるかに上回る荷物の量になってしまいました（結果、もう一つスーツケースを購入）。終了後に行くインターン先がハーグから電車で2時間半のところまで遠かったので引っ越し作業がとても大変でした。すべての荷物を自分で運搬したのですが今思えば宅配便などを使うべきだったと思っています。実はスリにあったのはこの引っ越しの時です。帰国時は船便を用いようかと思っています。

5 編集後記

この留学はたくさんの思い出が詰まっていると感じました。喜びや嬉しさ驚きという感情もあれば、淋しさ、孤独感といった感情もありました（この報告書を書きながら少しばかりか感傷に浸りました）。また、正直こうしとけばよかったということがないわけではありません。これは今後のステージでの活動に活かされることと思います。

そういったことも踏まえてこの留学を振り返ってみると、私のプラスになったことは確かだと思います。勉学のことについて触れるべきかもしれませんが、人生で初めて長期間家族、友人と離れて暮らす中で自分と向き合えたこと。多様性に富んだ環境で多くの価値観に触れたこと。この二つが私にとって今留学の最大の収穫でした。これらは多くの留学生・海外修行者の反省で使い古された言葉であるかもしれませんが、留学を経験した今、ああこういうことだったのかと思う次第であります。

最後に、本留学の実現にお力添えをいただいた関係者の皆様全員への感謝をここに表するとともに、この報告書を読んでもらった方にとって少しでも有益な情報を提供できることを願いたいと思います。